

はじめに

とうとう、ここまで来たのか。ずっとその気配を感じ、ひどく恐れていた濁流が、一瞬にして眼前に迫り、大切なものを破壊してゆく。そう感じるほど強い衝撃が走りました。

目にしたのは、米国の首都ワシントンで大統領選を「不正選挙」と盲信し、愛国的な正義感に突き動かされた人びとが、連邦議会へ雪崩れ込んでゆく光景を映したテレビの画面。議事堂の階段を上から下まで埋め尽くし、ガラス窓を勢いよく割って内部へと乱入するニュース映像です。その群衆、トランプ大統領を支持する人びとは、彼の演説やツイッターに扇動されて議事堂を一時占拠、その結果、警察官ひとりを含む5人もの犠牲者を出しました。

「Qアノン」と呼ばれるまったく根拠のない陰謀論をばら撒いて悦に入る男たちが、ペンス副大統領が直前まで着席していた議会の席でアジテーションする映像がその後インターネット上に流れます。戦後、日本に民主主義社会をもたらした米国における、前代未聞と言える事態です。

「群衆が雪崩を打つ」「人の命まで失われる」、それはまるで、すぐそばの町内で起きた現象に

思えるほど、私には身近に迫って感じられました。いやいや、それは考えすぎ、と思われる方も少なくないでしょう。自分ですら、「えっ、何だろう、この異様な感覚は？」とうろたえました。まるで濁流の泥水に頭まで浸かり、見慣れた街角の風景が瞬く間に暗転し、まったく別次元の戦場に立たされた気分。そのせいかしばらく身体が凍り付いて声も出せず、微動だにできませんでした。

そして、こうした体感自身の番組制作におけるさまざまな取材経験に根ざしてもたらされているのだと気づきました。

2021年、新年早々の1月7日（米国時間6日）の出来事です。日本では、新型コロナウイルスの第三波襲来で、東京都と埼玉など3県に二度目の緊急事態宣言が出された日でもありました。

私は、大阪に本社のある毎日放送（MBS）に入社してから30年以上、テレビ報道という職場に身を置いてきました。20代の当時はほんのり憧れを抱くパイオニア世代の先輩記者たちがいて、自由闊達なジャーナリズム精神がみなぎる現場と感じていました。なんとか新聞記者たちに追いついて、いずれ追い越さねばならないというベンチャー気質も残っていたと思います。が、SNSが普及するにつれて新聞もテレビも「オールドメディア」と揶揄されるようになり

ました。

2015年7月、安保関連法の強行採決によって国会に嵐が吹き荒れる中、私は報道局のニュース部門から番組制作部門、現ドキュメンタリー報道部に異動になりました。以来、少なくとも年に3本、1時間の番組を担当し、作り続けています。

MBSドキュメンタリー『映像』シリーズと呼ばれる毎月1本、最終日曜日の深夜0時50分から関西で放送しているこの番組枠は、1980年にスタートし、戦争や公害、障がい者や部落差別、在日韓国・朝鮮人や外国人問題、冤罪^{えんざい}、医療や福祉、原発、教育や文化など実にさまざまな視点から、個性的なディレクターたちが映像作品を輩出してきました。大阪から時代を映し続けてきたと言っても過言ではありません。

私はその先輩たちの系譜に連なるひとりにすぎませんが、本書ではいま切迫して感じられる社会が抱える問題と「ドキュメンタリーの可能性」について、次に挙げる4作を中心に語ってゆきたいと思います。

◇『なぜペンをとるのか』沖縄の新聞記者たち』（2015年9月27日放送）
プロデューサー澤田隆三と初めてコンビを組んだ印象深い作品です。「偏向報道」と自民党政
治家たちから批判される新聞社に40日間、密着しました。

◇『沖繩さまよう木霊こだま』基地反対運動の素顔』（2017年1月29日放送）
地上波の情報バラエティー番組『ニュース女子』で沖繩デマとヘイトが垂れ流され、放送史に残る汚点になったと言うべきその内容を検証したものです。

◇『教育と愛国』教科書でいま何が起きているのか』（2017年7月30日放送）
第55回ギャラクシー賞テレビ部門大賞を受賞した作品で、インパクトのあるインタビューが目されました。

以上の3つは、新聞、放送、出版（教科書）をそれぞれ取り上げていることから、「メディア三部作」と評してくださった人もいます。
そして今回、もっとも詳しく報告したいと考えているのが、4作目のこちらです。

◇『バッシング』その発信源の背後に何が』（2018年12月16日放送）

本作は、SNSによる学者や弁護士に対するバッシングに焦点を当てていますが、2020

年10月、日本学術会議の新会員任命において、学者6人が菅義偉首相により外された後、ツイッターでバッシングされたり、デマで業績を貶められたり、誹謗中傷される事態を生んだことも通底します。いまだ任命拒否された理由は明らかにされず、政府は「終わったこと」にしていますが、決して曖昧なまま終わらせてはいけない重大な問題です。

ニューメディアのSNSの世界と政治の在り方に触れたこの作品を、あらためて活字にして残しておきたい、それが本著を執筆しようと奮い立った理由です。

私なりに過去の番組制作のプロセスやディテールを書き残し、さらにはテレビ報道という現場の片隅で喘ぎながらも仕事を続けてきた体験が、メディア史の小さな一片をなすかもしれないと、いつからか考えるようになりました。新型コロナウイルス禍の苦難の時代を生きる私たちの「メディア考」の一助になれば望外の喜びです。

もっと踏み込んで言えば、いまこの社会の中で表現者であるなら避けて通れない、「圧力」というベールの向こうのマグマのような政治的エネルギーへの警戒が、前述の4作品に共通する土台です。

30年前、リベラルな論調を掲げていた記者やディレクターたちは、横柄に感じるほど自信に満ちて大きな顔をしていました。ですが、どうも最近はさまざまな「圧力」に晒されて、支持

率の高い政治家らを追及する取材がやりにくくなっているらしいのです。命は取られなくとも「記者として殺される」、そんな物騒な言葉も耳にしました。その現場はデマやヘイトとも隣り合わせです。これらをもたらす要因は何なのか。戦後75年以上が経過し、人びとが希求した「民主主義」という仕組みにいくつも穴が開けられ、その壁が少しずつ崩れかけているのではないのでしょうか。

原因はひとつではなく、複合的な危機が重なり合い、深刻とも言える事態を招いていると痛感します。そんな危うい状況を見るにつけ、多くのメディア人が連帯して防波堤にならなければ、「圧力」がさらに増幅し「壊れる」時代を迎えるのではないか、そう危惧しています。